

3 「三宅」墨書土器について

時期	胎土 分類	食膳具												食膳具合 計	貯蔵具						貯蔵具合 計
		杯 蓋			有台杯			無台杯			有台碗	無台碗	稜碗		折縁杯	壺・鉢・瓶類			甕		
		本書	伊藤 [2005]	合計	本書	伊藤 [2005]	合計	本書	伊藤 [2005]	合計						本書	伊藤 [2005]	合計	本書	伊藤 [2005]	
馬越Ⅰ期 (Ⅳ期)	A群	1 (5.9%)		1 (2.4%)	1 (7.7%)	1 (3.3%)	2 (4.6%)	5 (14.3%)	2 (2.3%)	7 (5.7%)					10 (4.8%)	1 (50.0%)	3 (20.0%)	4 (23.5%)	1 (12.5%)	2 (12.5%)	6 (18.2%)
	B群																				
	C群	15 (88.2%)	21 (84.0%)	36 (85.7%)	12 (92.3%)	23 (76.7%)	35 (81.4%)	27 (77.1%)	78 (89.7%)	105 (86.1%)			1 (100%)		177 (85.1%)	1 (50.0%)	11 (73.3%)	12 (70.6%)	7 (87.5%)	6 (75.0%)	13 (81.3%)
	D群	1 (5.9%)	4 (16.0%)	5 (11.9%)		6 (20.0%)	6 (14.0%)	3 (8.6%)	7 (8.0%)	10 (8.2%)					21 (10.1%)	1 (6.7%)	1 (5.9%)		1 (12.5%)	1 (6.2%)	2 (6.0%)
	小計	17	25	42	13	30	43	35	87	122			1		208	2	15	17	8	8	16
馬越Ⅱ期 (Ⅴ期)	A群		1 (5.3%)	1 (5.3%)					1 (1.0%)	1 (0.9%)				2 (100%)	4 (2.6%)						
	B群		15 (78.9%)	15 (78.9%)	1 (100%)	22 (91.7%)	23 (92.0%)	3 (100%)	97 (93.3%)	100 (93.5%)					138 (90.2%)	1 (100%)	5 (45.5%)	6 (50.0%)	3 (100%)		6 (66.7%)
	C群		3 (15.8%)	3 (15.8%)		2 (8.3%)	2 (8.0%)		4 (3.8%)	4 (3.7%)					9 (5.9%)		6 (54.5%)	6 (50.0%)			6 (33.3%)
	D群								2 (1.9%)	2 (1.9%)					2 (1.3%)						
	小計		19	19	1	24	25	3	104	107				2	153	1	11	12	3	3	6
馬越Ⅲ・Ⅳ期 (Ⅵ期)	A群															1 (5.6%)	1 (5.3%)		1 (4.1%)	1 (4.1%)	2 (4.7%)
	B群		7 (100%)	7 (100%)		11 (100%)	11 (100%)	2 (100%)	67 (100%)	69 (100%)					87 (98.9%)	1 (100%)	16 (88.8%)	17 (89.4%)		19 (79.2%)	19 (79.2%)
	C群											1 (100%)			1 (1.1%)					4 (16.7%)	4 (16.7%)
	D群																1 (5.6%)	1 (5.3%)			1 (2.3%)
	小計		7	7		11	11	2	67	69		1			88	1	18	19		24	24
馬越Ⅳ期 (Ⅶ期)	A群																				
	B群				1 (100%)	1 (100%)		4 (100%)	4 (100%)	2 (100%)	2 (100%)				9 (100%)	2 (100%)	2 (100%)		1 (100%)	1 (100%)	3 (100%)
	C群																				
	D群																				
	小計				1	1		4	4	2	2				9		2	2		1	1

※〔伊藤2005a〕に加筆して転載

第14表 須恵器胎土別組成一覧表



第33図 馬越Ⅰ期須恵器胎土別組成図

3 「三宅」墨書土器について (第34図)

今回の調査区の出土遺物で最も注目されるものは、須恵器杯蓋内面に墨書された「三宅」の文字資料である。「三宅」の意味するところは、大きくは施設名を表すものとする見解がある〔吉岡1983ほか〕。ここではその重要性に鑑みて、新潟県内及び北陸地域における「三宅」に関連する出土資料について概観し、馬越遺跡から出土した意義を探ってみたい。

新潟県内からは、管見では馬越遺跡以外で、3遺跡から「三宅」を含む墨書土器や木簡が出土している。

船戸桜田遺跡 胎内市(旧中条町)にある遺跡で、須恵器無台杯底部外面に「三宅人神」と記された墨書土器が1点出土している〔水澤ほか2003〕。「三宅人神」は人名と見られ、土器の年代は9世紀前半頃である。船戸桜田遺跡は沼垂郡もしくは岩船郡の境界付近にあり、水運で連結された塩津潟沿岸遺跡群のひとつで、官衙遺跡が集中するエリアに存在する。溝に囲まれた底付き建物が検出され、木簡、墨書土器、人面墨書土器、木製祭祀具など官衙関連の遺物が多数出土している。水澤氏は「三宅人神」について、蒲原郡の富豪層で位階を授けられたことが『続日本紀』延暦3年(784)に記された人物「三宅連笠雄麻呂」との郡域を越えたかかわりがあったことを推測されている〔水澤2005〕。

川根谷地墓所遺跡 新潟市（旧横越町）にある遺跡で、須恵器無台杯底部外面に「三宅」と記された墨書土器1点が採集されている。土器の年代は9世紀後半である。川根谷地墓所遺跡は沖積地内の自然堤防上に立地し、古代蒲原郡内にある。一部発掘調査が行われているが、目立った遺構・遺物は確認されていない〔江口2001〕。この「三宅」墨書土器を「三宅連笠雄麻呂」による蒲原郡の開発との関連性を示すという見解がある〔神田2003〕。

箕輪遺跡 柏崎市にある遺跡で、平成8年～12年にかけて発掘調査されている。平成11年の調査で自然流路から「三宅史御所」と記された奈良時代の文書木簡（1号木簡）が出土した。遺跡の全体像については正式報告が未刊のため、不明であるが、木簡の記載内容などから「三嶋駅」の跡と考えられている。自然流路からは木製黒漆塗りの壺甕や多量の土器、木製祭祀具などが出土し、官衙遺跡の様相を呈している。木簡については解説、報告がされており、「三宅史」は人名で、古志郡の式内社として見える「三宅神社」との関係が想定されている〔相沢・小林2000〕。

以上のように、県内の「三宅」関連資料については、船戸桜田遺跡の「三宅人神」墨書土器、箕輪遺跡の「三宅史御所」木簡については、人名であり、文献史料に見える人物や神社との関連が指摘されている。川根谷地墓所遺跡の資料についても同様の視点からの解釈がされている。なお、詳細が不明の川根谷地墓所遺跡を除き、官衙関連の遺跡から出土している点は留意しておきたい。

次に北陸地方における「三宅」墨書土器出土遺跡について概観してみたい。管見では石川県の3遺跡から出土している。

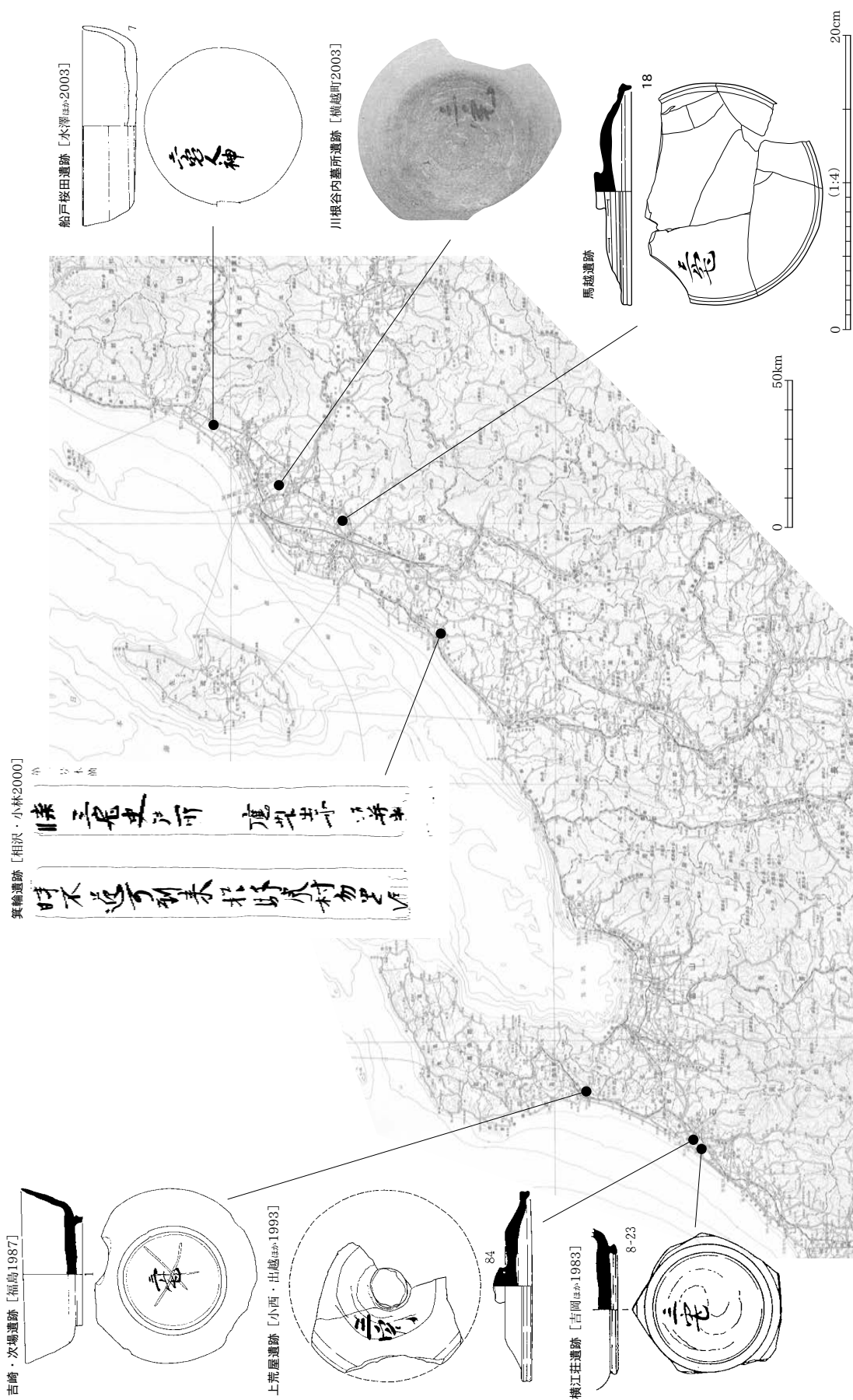
吉崎・次場遺跡 石川県羽咋市にある国指定史跡の遺跡で、弥生時代中後期の遺跡として著名である。古代の集落跡からは井戸、柱穴などが検出されているが、調査区が狭く具体的な集落景観は不明である。「三宅」墨書土器はW調査区の包含層から出土している。須恵器有台杯底部外面に記される。ほかに調査区が異なるが、銚帯金具の巡方、丸軋、銭貨の「和同開珎」などが注目される〔福島1987・福島ほか1988〕。

上荒屋遺跡 石川県金沢市にあり、次に記す国指定史跡東大寺領横江庄遺跡に隣接した位置にある。SD40とされる河川跡からは船着き場遺構が確認され、荘園の物資輸送に利用されたと見られている。1,000点を超える墨書土器、付札木簡、瓦塔、木製祭祀具、銚帯金具の巡方、丸軋、銭貨の「和同開珎」・「神功開寶」などが出土している〔小西・出越ほか1993〕。「三宅」墨書土器はSD40から出土している。須恵器杯蓋外面に記される。「東庄」「西庄」「南庄」「北庄」などの墨書土器から横江庄遺跡に関連した遺跡と把握されている。また、墨書土器は7期に区分され、建物跡との対応関係から、4段階の変遷が想定され、「三宅」墨書土器は第2段階の所産と想定されている。古代荘園遺跡の諸相を検討した宇野氏によれば、この第2段階については「在地有力層主導型」の事例とされている〔宇野2001〕。

横江庄遺跡 石川県松任市横江町に所在し、東大寺文書及びその地名と「三宅」墨書土器が伴う建物跡などから東大寺領横江庄の荘家に比定され、国指定史跡となった北陸を代表する荘園・官衙複合遺跡である。年次的調査で、荘家、倉庫郡、祭祀場、仏教施設等が検出されている。瓦塔、木製祭祀具、銚帯金具の鉋尾、巡方、中国陶磁器、奈良三彩などが出土している〔吉岡ほか1983・1996〕。「三宅」墨書土器は荘家跡1区から出土している。須恵器有台杯底部外面に記される。

なお、これら3点の「三宅」墨書土器の年代については8世紀末葉～9世紀初頭に比定されている〔出越1998〕。

以上のとおり、石川県下の3遺跡は、「三宅」墨書土器は荘園関連の施設名を表すと考えられている。



第34図 「三宅」関連文字資料出土遺跡分布図
(国土地理院 平成19年発行 「関東甲信越」・「中部近畿」 1:500,000原図)

馬越遺跡出土「三宅」墨書土器は、後述するように石川県横江庄遺跡、上荒屋遺跡の様相に近く、荘園関係の遺物である可能性が高い。荘家跡と関係したと言えるような遺構との関連性を示す出土状況ではないが、近接した位置から石製分銅や漆塗り烏帽子（三条市新田川遺跡）などの特殊遺物が出土しており、「三宅」墨書土器をキーワードに包摂され、関連付けられるような遺物が出土していることは視野に入れて検討する必要がある。なお、未報告ではあるが、馬越遺跡のほ場整備事業地内の調査区から須恵器無台杯底部外面に「中家」と記された墨書土器が1点出土している。先に報告した「妙越庄」墨書土器も含め、点数は比較にならないが、上記した石川県上荒屋遺跡などと共通した施設名称の構成要素が揃っていることは極めて注目される。記された土器の年代観からすると「三宅」→「妙越庄」→「中家」となる。石川県内の墨書土器を集成された成果によれば、上記した3遺跡において「宅」と「家」の墨書土器が相伴している〔中森・布尾・宮川・春田1998〕。つまり、馬越遺跡は全体的には、石川県で確認されている著名な荘園遺跡に類する内容を有することが墨書土器からして明確となったと言えよう。

近年、新潟県内においても、上越市岩ノ原遺跡で「石井庄」・「石庄」墨書土器を伴う掘立柱建物跡群が検出され、8世紀中葉に成立したとされてきた東大寺領石井庄の荘所が確認されている〔高橋^{ほか}2008〕。また、蒲原郡内においては、宝亀11年（780）「西大寺資財流記帳」に鶉橋庄、槐田庄が成立したことが窺え、地名や式内社などから前者は五泉市に後者は三条市地内にあったとされる〔桑原2005〕。馬越遺跡ではそれらの文献に記載された官大寺に施入された荘園とは異なるレベルの荘園が存在した可能性が高い。そして、先の報告において、その存続年代や遺構・遺物の内容から想定した馬越Ⅰ期の性格として、「有力者を含んだ一般的集落」としたが、初期荘園ないしは古代前期荘園〔宇野2001〕の管理や経営に関連した拠点的遺跡として成立、発展した可能性を指摘しておきたい。

4 集落の景観について（第35図）

今回の調査区域は限定された範囲であるため、集落景観を俯瞰できる状況ではないが、本線部分のⅣ区遺構図面と合成し、特殊遺物の出土位置を第35図に示した。ここからは、河川3及び108とⅣ区河川2が繋がりと、蛇行する流路が復元できる。河川北側での集落の展開は詳細が不明であるが、河川3の遺物出土状況からは、北側から投棄された状況が窺え、関連した遺構群が展開する可能性が高い。河川南側には遺構が密集するが、主体となる馬越Ⅰ期では、Ⅳ区においては柱穴、土坑、畝状遺構、溝などが確認されるにとどまり、さほど遺構密度は濃くない。馬越Ⅰ期の中心は本線部分のⅠ区で、Ⅳ区ではその後、馬越Ⅴ期、Ⅵ期の遺構が顕著である。地形から、比較的安定した高いところに畝状遺構などの生産の場、やや低くなったところに柱穴、土坑などの居住の場が設けられている状況が窺える。掘立柱建物跡は主軸の向きから、河川の流路を意識して構築された可能性がある。出土遺物の中で注目される「秋人」墨書土器はⅣ区と約50m離れた地点から出土し、「三宅」墨書土器、「物」ヘラ書き土器、漆液容器などが河川3から出土している。

既往の調査から、馬越Ⅰ期については、井戸や倉庫が伴う点が異なるとしながら、一般的集落で、有力者を含む最初の開発村落と考えた。しかし、今回の調査区で検出された遺構からは河川に面し、河川を意識した集落で「三宅」墨書土器などから荘園に関係した遺跡であったことが推測される。石製分銅も関連した遺物であろう。越後平野においては、古代官衙遺跡群が内水面交通体系に関連しつつ、地域社会の交通・生産・流通などの様々な分野にわたって有機的に機能していたことは、つとに指摘されること〔坂井